魔法のダイアリー　プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：亀田隼人　　**所属：**東京都立南花畑特別支援学校　　**記録日：**平成 31 年２月９日
キーワード：コミュニケーション、表現、見通し

【対象児の情報】

・学年　知的障害特別支援学校小学部５年

・障害名　知的障がい　広汎性発達障害

・障害と困難の内容

・愛の手帳３度（東京都の療育手帳で中度に相当する。「何らかの援助のもとに社会生活が可能」とされる。）

・人懐こい性格で、スキンシップを自ら求める姿が多く見られる。好きな人に自分の食べ物を分けてあげようとしたり、依頼に喜んで応じたりするなど、人との関わりが大好きである。

・言語面：２語文は確実に表出する。
　　：日常生活に使用する単語は概ね理解している。
　　：平仮名による簡単な文章（「○が□で△をする」等）を理解する。
　　：イラストを見て適切な語を平仮名で書くことができる。
　　：特に音声では、５Ｗ１Ｈの理解が曖昧。
　　：援助スキルが定着していない。
　　：自分の情緒を適切に言語化できない。

・数　面：時計は読めない。タイマーの理解があり、落ち着いているときであればこれを使用して待つことができる。
　　：カレンダーは大まかな理解があり、１週間程度先にある行事ごとなどを見通すことができている。

・生活面：特定の人を嫌がり集団に入れないことが多い。
　　：自分の意思は、落ち着いていれば言葉で伝えることができる。強い負荷に対しては大声を出して泣き叫んで拒否する。
　　：聴覚に過敏があり、苦手な音に対してはその場から逃避したり泣き叫ぶパニックを起こしたりする。

・困難の整理

対象児は音声のやり取りが苦手であった。聴覚の過敏さもあった。成長に従って周囲の人や場面がわかるようになってきたことにより、見通しが持てないことへの不安が出てきた。不安を解消しようとイヤマフや心地よい音楽をお守りとして身につけるようになった。しかし、それらはさらに周囲の状況を把握しづらくし、不安を助長させるものだった。

そこで、対象児には、得意な視覚的手段を活用することで「見通しを持たせること」が必要だと考えた。文字などを使ってやり取りすることで「わかって活動に参加できるようにならないか」また、自分の不安を前もって相手に伝えることで「対処方法に気づけるようにならないか」と考えた。

【活動目的】

1. ねらい

◆－１　前向きに参加できる授業を増やす。

◆－２　自分の思いを相手に伝え、共感してもらう経験を積む。

2. 実施期間　平成 30 年６月～平成 31 年２月

3. 実施者　亀田隼人

4. 実施者と対象児の関係　学級担任

【活動内容と対象児の変化】

1. 対象児の事前の状況

1)指導経過

(1)前年度までの授業参加状況

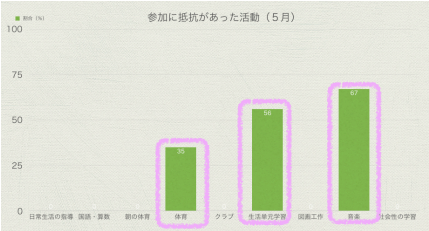
2017 年度から、音刺激に対する防衛反応が顕著になった。苦手な音を出す友だちがいる空間に入ることができなくなった。「苦手な授業を教室の外から 10 秒のぞく」からスタートし、2017 年 7 月時点では、本人が安心するためのグッズを持参することで部分的な授業参加が可能になった。「安心グッズ」は、自分の好きなアニメキャラクターを担当教員と一緒に職員室でプリントアウトしたもので、それらを専用の籠に入れて教室移動をしていた。日課のどこかでプリントアウトする行為が活動への励みとなっていた。年度末にはイヤマフの着用と、自分の iPod で好きな曲を聴くことで外部からの聴覚情報を遮断することにより体育、音楽、行事以外の授業に参加できるようになった。

今年度初の姿

(2)今年度の授業参加状況

今年度になって、対象児が抵抗を示す場所や授業を調べた（図１）。生活単元学習、音楽、体育でその傾向が見られ、多場面ではゼロであった。

◉生活単元学習：学年集団で行うことが多い授業。集合する教室の並びには、対象児が苦手な声をよく出す児童の教室があり、それが抵抗になっているのではないかと考えた。



（図１）参加に抵抗がある活動

◉音楽：実施場所のプレイルームは音が反響しやすくその空間が嫌なのではないか。また、そもそも音楽は対象児が苦手とする「音」を扱う授業であり、授業自体に抵抗があるのではないかと考えた。

◉体育：音が反響しやすい体育館という空間が嫌なのではないかと考えた（図２）。ただし、同じ体育館で行う別の授業「朝の体育」や「クラブ」では、抵抗なく参加できていた。「朝の体育」は、いつもやることかが決まっていること、そしてその内の「ランニング」では、1 周走ったらもう 1 周は担任におんぶしてもらう楽しみがあること、また「クラブ」では、スクーターボードに乗って引いてもらう楽しみがあることが理由ではないかと考えた。そこで、やることがわかったり、本人にとっての楽しみがあったりすると活動参加への抵抗を和らげるのではないかと考えた。

（図２）入館をためらう

(3)校内生活

校内において想定せずに苦手な友だちに出くわしたときはパニックを起こす状況であった。また、イヤマフや iPod によって聴覚情報を遮断するようになってからは特に音声でのやり取りが困難になった。

［エピソード１］

対象児が iPod を持って泣き叫んでいたため近づくと、スクリーンを見せて「直して」と訴えてきた。傷ついているとのことだったが、実は傷ではなく汚れだった。音楽は最大音量で鳴っていたので「大丈夫」と言ったものの本人に声が届かなかった。そこで教室のホワイトボードに「よごれています。まだつかえる。」と書くと間も無く落ち着いて、その後の活動に移ることができた。

このことから、文字は本人の気持ちを整えるのに有効ではないかと考えた。

［エピソード２］

iPod の扱いがラフな対象児に対して、「ケースをつけておくとこわれません。」と書くと、外していたケースを付け直した。

このことから、文字は、対象児に見通しを持たせるのにも有効ではないかと考えた。

（４）登校

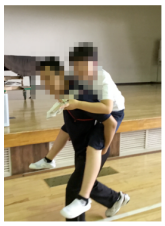
2017 年 10 月以降、登校時におけるスクールバス乗車にしぶりが出始めた。乗車しぶりは、今年度になってからはヘルパーと一緒にバス停に向かう水～金曜日はないが、母親と向かう月、火曜日は依然として起こっていた。

2. 活動の具体的内容

ねらい達成のために、以下の取り組みが必要だと考えた。

◆－１－(1)学校を「楽しい場」にするための取り組み

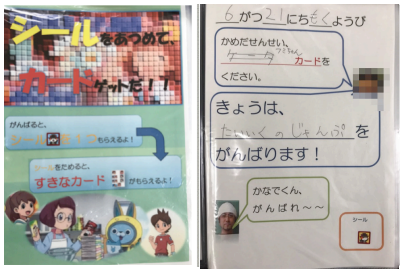
①対象児が、授業自体を「やりたい」と思うものにするために、授業の中に本人の楽しみを入れるようにした（「朝の体育」における「おんぶ」など）。そして、それらを学級担任だけでなくいろいろな人と行うことにより、学校に安心できる人、信頼できる人を増やしていくことにした。



（図３）楽しい場になるための取り組み

②活動に対するモチベーションをつくることが必要だと考えた。対象児の好きなアニメキャラクターをラミネートしたカードを、頑張りに応じてあげるようにした（図３）。

③対象児が、おんぶなどのスキンシップやカードなどの欲しい物を励みに、授業参加ができるようになってきた段階で、教師ががんばり目標を提示しそれに応じる機会を設定した。目標とご褒美は視覚的に示した（図４）。このことにより、本人が目的を改めて相手に表明し心構えを作ることと、途中で嫌な刺激があったとしてもそれらを見ることで目的意識を持ち続けることをねらった。



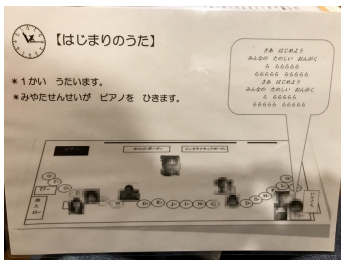
（図４）欲しい物を目指す

◆－１－(2)「わかって参加する」ようにする取り組み

④「ByTalkforSchool」（図５）を使って本人とやり取りしながら、学校における予定を告知した。導入時に母親と３人で使い方を確認した。iPhone は「お話メモ」と称し、それ以外には使えないことを約束した。また、毎日覗くこと、優しく扱うことを確認した。さらに、対象児は日常的に家庭の iPad で YouTube 視聴やネットサーフィンを楽しんでいたため、保護者同伴で「お話メモ」を使うようにした。「お話メモ」でのやり取りを通して、対象児に一番響くモードは何かを吟味しようと考えた。日々の連絡帳などで本人の様子や使い勝手をご家族から聞き取ったり、学年の教員などと協議したりすることで、状況を総合的に捉え、必要に応じて改善するようにした。

（図５）「ByTalkforSchool」

⑤授業における場所、そこに至る経路、座る位置、参加者、活動内容、回数を図にして示した（図６）。対象児は日常的に You tube 視聴を楽しんでおり、動画の理解があったため、移動教室など長時間に及ぶ活動では、「DropTalk」のスケジュール機能を活用して動画で示した（図７）。



（図６）授業内容シート例

（図７）「DropTalk」

◆－２－⑶自分の「思いを伝える」ための取り組み

⑥「ByTalkforSchool」でのやり取りでは、その日の出来事を話題にして、対象児が感想などの思いを表明できるように意識的に発問するようにした。

3. 対象児の事後の変化

①「朝の体育」の授業では、学級担任以外の特定の教員に自らおんぶを要求する姿が見られるようになった。また、お守りグッズの一つである iPad やカードコレクションをステージに置いたままでも活動に参加できることが増えた。さらに活動を重ねるうちに、おんぶをしなくても教員が手を繋いだり隣を並走したりすれば自分の足で体育館を数周走り続けられるようになった（図８）。

（図８）自分の足で走る

②③がんばるとカードがもらえることがわかるようになると、自分が欲しい物（カード）とがんばることを自分から伝えるようになった。求めたカードを目指して、体育の立ち幅跳びの授業に参加することができた。そしてこの頃には、お守りグッズの入った籠を持たなくても教室移動や授業参加ができるようになってきた。生活単元学習の授業では、イヤマフをつけなくても学年の皆の前で活動ができた（図９）。

　カードを励みにスクールバスへの乗車を促すと応じることができた。２学期以降はカードのご褒美がなくても乗車できるようになった（図 10）。

（図９）イヤマフなしで授業参加

（図 10）スクールバスに乗車

④「ByTalkforShcool」のアプリは、導入直後からスムーズな文字入力ができた。スタンプもうまく使いこなした。尋ねられたことに答えるだけでなく、好き嫌いといった感情を表明したり画像に「いいね」スタンプで応じたりするなど、会話を楽しむ様子が見られた（図 11）。

本校に出入りする外部専門員との話し合いでは、対象児は助詞の理解が未熟であり、文章のキーワードを読み取ることで

（図 11）導入時のやり取り

内容を推測していることが話題になった。そこで表記は、キーワードを読み取りやすいように助詞との間に空間を設けたり文節ごとに改行したりする工夫をした（図 12）。

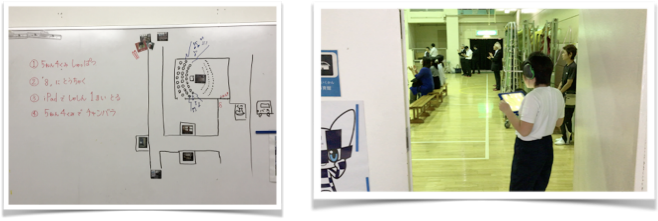
音楽への授業への参加を求めると、大きな葛藤の末に「やる」と返答し、数分ではあるが自らプレイルームに入ることができた。その日のやり取りでは、入れたことを素直に喜ぶ表現があった（図 13）。しかし、プレイルームでの音楽の授業への参加は定着しなかった。

（図 12）表記の工夫

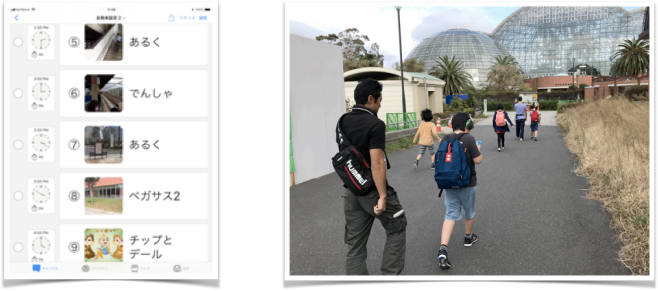
（図 13）プレイルームでの音楽の授業へ参加

⑤図を参照しながら、体育館で年に一度行われるオータムコンサートに部分的な参加ができた（図 14）。

移動教室は、昨年度にも似た行程で実施されたが抵抗が強く宿泊せずに帰宅していた。今年度の事前学習では行程を図にして提示したが効果はなかった。そこで、移動教室の全行程を動画にして本人に提示し、スケジュールを作成した。各動画を何度も見返しながら組み上げていた。当日はスケジュールをその都度確認しながら最後まで参加することができた。学年集団から離れた行動を基本としたが、一緒に散歩をしたり入浴をしたりすることができた（図 15）。参加できたことはご家族も喜んでいた。



（図 14）オータムコンサートへの参加



（図 15）移動教室への参加

⑥やり取りを重ねるうちに、夕飯のメニューや家族で出かけた場所や学校で行った活動、またその感想、家庭でこれから行う予定などを教えてくれたり（図 16）、困った時に援助を求めたりするようになった（図 17）。

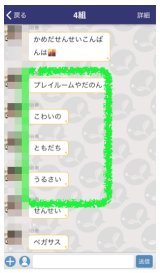
（図 16）感想の表明、出来事や予定の報告

［エピソード３］

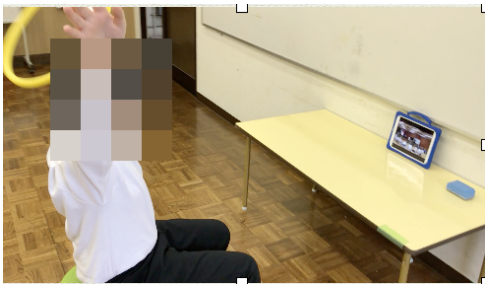
ご褒美で貯めてきたカードを知り合いの家に忘れて来た。その困った状況を文字で担任に伝えた。翌日、新しいいくつかのカードを学級担任にもらい、気を取り直すことができた。困ったときは泣いて大声を出すかその場から逃避するかの表現しかなかった対象児だが、自分の困りを相手にわかるように伝えられるようになった。

（図 17）困りを伝える

音楽の授業についての話題では、嫌がる理由についてプレイルームという場所や友達の出す声をあげていた（図 18）。そこで、対象児の学習を保証するために活動場所を教室に変え、学習集団を編成し直した。教室での授業では笑顔で課題に向かうことができるようになった（図 19）。



（図 18）音楽の授業での困り



（図 19）教室での音楽の授業に参加

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

１.前向きな参加には、本人に「活動へのモチベーション」があることや、本人が「活動内容を知っている」ことが前提になるのではないか。

２.本人が活動内容を知るには、本人に「思いをやり取りする方法」が保証されていて、それを活用して「やり取りできる相手がいる」ことが必要になるのではないか。

３.活動内容を伝えるモードの一つとしての画像は、対象児が見通しを得るのに有効だったが、作成者は対象児が必要としている情報を予め的確に捉えている必要があり、それらがずれてしまったり足りなかったりすると、効果が薄れるのではないか。そして、移動教室のような慣れない場所や長い時間続く活動では、必要情報のずれや不足が起きやすいのではないか。本実践では、動画は、その欠点を補うものだったのではないか。使用目的や内容によってモードを吟味する必要があると感じた。

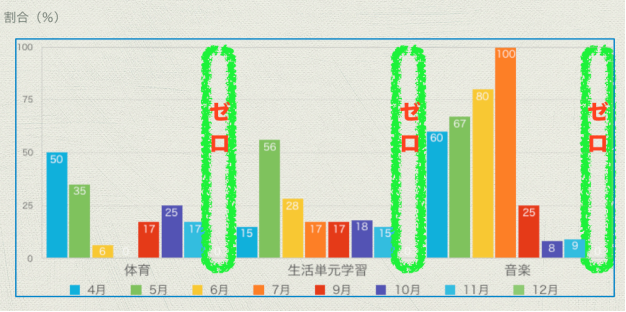
４.方法や相手の保証は、本人の安心や自信を広げ、周りの人との関係を深めたり自立した生活をおくったりするきっかけの一つとなるのではないか。

・エビデンス（具体的数値など）

１.２.について：カードやおんぶなどの「楽しみ」あるいは「ByTalkforSchool」での予定の告知によって、対象児が授業に参加できるようになったこと（図 20）。また、スクールバスでの通学が安定したこと。

３.について：活動内容を示した図が、オータムコンサートなどで有効だったが移動教室では効果がなかったこと。また、動画によるスケジュールにより移動教室に参加できたこと。

４.について：好きな友だちに自分で作った紙工作の作品をプレゼントしたり、学級担任以外の教員に欲しい物を要求したり、求めに応じて得意な歌を披露したりする姿が見られるようになったこと。人との関わりが好きという対象児本来の姿が観察されるようになった。



（図 20）授業参加の割合の推移

「BytalkforSchool」でのやり取りでは、自分の思いを表情スタンプで表現することが多かった。実生活場面で表情に言葉を合わせていくことで語彙を増やしたい。より細かな思いのやり取りができるようにすることで周囲の人との関係を深めていきたいと考える。